

沖縄 — 三里塚

11・13「人民と戦士」の全国集会報告

★「と」の会アピール

★「人民と戦士」の全国集会へむけて

★人民と戦士の発言

★懇談会のまとめ

1971—72年冬

11・13全国集会実行委員会事務局

「と」の会準備会

「と」の会アツピール

いま、われわれは、明らかになつて一つの新しい時代の到来を予感しつつある。それは、戦士「と」、人民の結合の時代である。このパンフレットにおさめられた「11・13人民と戦士の全国集会」における一連の発言は、そのことを明確に示しているであろう。

そしていま、われわれの前におかれているまぎれもない事実は、こうである。すなわち、あの60年代末期の敗北のなかから立ちあがらわれ、「武装の道」を追求してたまたまかかってきた「戦士」たちが、ほんもの戦士として成長・開花するいとまもないままに、いまや国家権力によって分断・孤立させられ、むきだしの姿で護身なき弾圧にさらされている。さらに、沖縄で、三里塚で、都市最底辺で、基地周辺で、一たびは敵＝国家権力とのたたかいに立ちあがった「人民」が、ふたたび日常の生活諸関係のなかへとひきもどされ、その重圧にあえぎ、根をのんで息をひそめつつある。

しかし、われわれは、こうした圧倒的に困難な状況そのもののなかに、戦士「と」、人民の結合する新しい時代の到来を予感するのだ。たとえば、71年9月16日を頂点とする三里塚第二次強制収容阻止斗争において、何が起ったか。三里塚の農民は、全国からは参じた無数の「戦士」を包みこみ、「戦士」たちは三里塚の農民と結びつき、かくて農民と「戦士」は、たがいに「思い思われる」という関係をつくりあげたのである。そして、その時、九月の三里塚における敵＝国家権力は、決して不敗を誘ふことはできなかったのだ。

「戦士」と「人民」一われわれは、問題をこう提起しなければならない。人民という水を離れた「戦士」という魚は、「戦士」として生きつづけ、真の戦士へと成長することが、ついにできない。人民の真紅の血こそは、「戦士」の根拠であり、すべてである。同時に、自らの内部に「戦士」をかかえこみ、それをはぐくみ育てることなしに、「人民」はついに何ものをも獲得することはできぬ。これらのことを、1971年9月の三里塚は、戦いの鮮血、人びとの「生」と「死」を通じて、われわれに深く教えている。

いま、われわれの「戦士」は、そう呼ばれるにはあまりに貧しいことを深く自覚するけれども、それゆえに、その貧しさを克服することを自らの義務ととらえ、人民を知り、人民と結びつき、人民に学ぶことによって自らを真の戦士として誇りに開花させる戦場を求めて、新たに旅立ちとうとしている。

しかし、われわれの「戦士」は、自らの貧しさに屈服し、戦士としての自己形成の志を投げず、人民のなかへへたりこむことはしないであろう。そうした形での「人民」との「結合」が、ついに戦いの新たな地平を開くことにならぬことを、あれこれの経験はおしえてくれるからだ。自らの貧しさを知りつつ、「戦士」としての自覚の重さに耐えて、謙虚に人民に学ぶ、一それがわれわれの「戦士」の旅の姿でなければならぬ。

全国の心ある同志諸君！

自らの自覚と責任感と決意とにもとづいて、目下の困難な状況を切りひらくために、われわれとともに人民を信じ、「戦士」の旅をそれぞれに開始しようではないか！

1971-72年冬

11・13人民と戦士の全国集会事務局
「と」の会準備会（仮称）

11・13「人民と戦士」の全国集会に結集せよ！！

< 11・13アピール >

現在ヴェトナム人民の英雄的な戦いの勝利を先頭にして闘っているパレスチナ・ラテンアメリカ・中国・アイルランド・フィリピン等、そして米帝国内の下層人民等の全世界の人民の力によって、米帝は敗北の道に追いつめられている。それは、米帝を筆頭とする帝国主義総体の基底的後退であるが故に、彼らの支配は、資本主義の原則を自らの手によって破壊することを通してしか維持されないのである。全世界で、日本全国で強化されつつある分断と管理抑圧体制と暴力的弾圧がそれであり、言い換えれば、それは資本主義の腐朽の進行そのものである。

我々の周囲に拡がっている状況は基本的には敵を追いつめていながら、全ての交通形態の再編と混乱に強いられて、我々には未だカオスにみえる。八派政治はそれに解釈とスローガンとスケジュールを与えたが、それが何一つ確実な「事実」をもっていなかったが故に、全国全共闘の分断という形で、過去のものとなりつつある。しかし、今我々は、そのカオスの中で、確実なもの一つを捉えた。それは71・9・16を結節点とする三里塚闘争である。その捉えたものも、またカオスであったが、八派政治の「系統性」の貧困さに比べてはるかに豊かなカオスであり、その中にこそ、人民と戦士の出会いがあり、その中にしか、人民と戦士を見出すことはできない。

9・16の、矛盾を胎んだ、それ故豊かな出会いは、決して偶然ころがりこんできたものではない。互いに求め合いながらも、結合することの困難な、資本主義の性格に規定された個々の「強いられた手工業」の積み重ねのうえで結合はあったのである。その一方は武装の追求であり、大ぼろ、H・Jなどを経て、71・6・17とそれ以降の姿なき戦士たちの爆弾の使用を軸とす

る連続闘争であった。もう一方は、足かけ6年に亘る粘り強い三里塚空港反対同盟の闘いの蓄積であり、また、未解放部落、在日朝中人民、公害、農村、医療、基地、中小企業等の諸領域での運動である。

戦士たちは、自らの捉えた確実なもの、眼前のカオスを吟味することによって、自らの未熟さと、自らの課題を発見しなければならない。人民の闘争にとって、何より大切なものは戦士であり、人民が、その闘争で依拠する第一のものは、人間であって、ブルジョアジーのように武器ではない。「革命的理論」のあれやこれや、「前衛の指導」によって大衆の革命的エネルギーを凝縮させられるような仕方、自らを組織するまでに、戦士自らとその戦列を高めることなのである。戦士は、戦士としての作業を続けなければならない。すぐさま人民と合流できないときは、人民に、戦士たちがなんのために何を攻撃するかを明らかにするという方法で、人民と関係しなければならぬ。しかし、それは常に敵によって分断され、人民-戦士を個々のものとして押し込めている閉鎖された状況を突き破る方向での作業でなければならない。

戦士は進撃しなければならない。沖縄にはより豊かな人民と戦士を創出する巨大なエネルギーが潜在している。全ての矛盾の坩堝である沖縄では、我々と米帝という関係、そして我々とヴェトナム人民、中国人民、そして黒人兵を中心とする反乱兵兵たちという関係は、具体的な事実関係となる可能性がある。このことによってはじめて、世界は、「世界一般」から「我々の世界」となることができるだろう。

我々は、三里塚であいまえた、人民と戦士の資質とその構造を、沖縄へ、またあらゆる領域へ拡大するために、全国の人民の名に値するひとびと、戦士の名に値するひとびとの集会を提起する。 11・13 午後1時 東大安田講堂前に結集せよ。

<三里塚よりのアピール>

71・11・1 三里塚芝山連合
空港反対同盟 青年行動隊

三里塚に対する強制収用が終わったと権力者や、あるいは、その走狗どもがいくらわめいたところで、三里塚に生きる人々の生活はちっとも終ることはない。現に、我々は相変わらず田をつくり、土を耕し、部落などの会議をもって、これからの空港粉砕闘争をいかにするのか、戦いを続けてゆくのにこれまでの生活形態や戦闘態勢で充分であるのかどうか、果してこのままで、我々に勝目があるのか、我々三里塚の農民が権力者の意図や力をくだけ割って勝利するとはどのようなことなのか、など毎日考え続けている。

強制収用のあと、執行吏-友納は、すかさず三里塚が身動きできないように反対派農民を封じ込めようと、空港騒音に対する家屋の防音工事を県費で賄うという案を三里塚周辺にばらまき始

めて、反対同盟の周辺部落への火を消そうという算段に出てきた。住民が動揺すれば、その他多くのまだ実現できない空港周辺の関連事業にも手をつけたいというのが友納のねらいである。

一方、三警官死亡事件の原責任を追求されることを恐れ、また、三里塚がそのような事件の発生する状況に追いこまれた、その政治責任を不問とするために、更には、これほどまでに生長した戦場の息の根を止めるために、それが不可能ならば、東の間でもその動きを封ずるために、連日連夜百数十の機動隊を駐留させ、団結小屋を襲い、学生を見れば追いかけて殴り、でたらめな家宅捜査を続けている。

第一次強制収用に対する戦いから第二次収用に対する戦いにおける我々の思想と政治、基本戦略と戦術について極めて深い、徹底した洞察と検討が、いま必要なのである。それが我々のこれからの生と戦い、戦いと共同体、生活と戦い、そしておのれ自身の生について最も重要なであろう。そのことは言うまでもなく、大木よねばあさんの戦いと生、三の宮文男の死と彼の思想に我々がつながってゆく大切な道なのだ。

昨年12月6日-7日に、全国研修隊の報告をまわって、青年行動隊が提起した三里塚の戦う農民同盟の基本的組織戦略について我々は確信をもち三里塚の戦いの思想と生活こそ、その帰趨を決するものと考えている。すでに6年をかけた戦いについての認識にもかかわらず、我等の力は全国住民集会和会議の意義を総括し得ずして三里塚闘争はじまって以来の重要な戦いに突入した。いや、むしろ、この戦いの質こそがその意義を決するものであると考えていた。万におよぶ農民との連台と、労働者、学生の戦闘団との共同の戦いは、権力に対する人民の戦いについての極めて現実的な諸問題を提起して、更に、権力の一角をせん滅し権力者の政治に穴を明け、その政策の矛盾を照射した。

だが、我々にとって、三の宮文男の死と大木よねばあさんの生は、それでもなお極めて重く深い。

この三里塚の戦いにおける生と死を我々がどのように、おのれ自身のものとして研ぎ澄ましてゆくか、これが我が農民戦線の緊急な課題であり続けていることに変わりはない。

我々は、地域の底深く根吹き、奔流する戦士たち、あまりにも苛酷な状況にうずくまり、考え続ける思想の息吹きに、一度でも多く、一人でもたくさん我等の戦いを語り、かつ、新鮮、鮮烈な血に溢れたいと願う。

11・13人民と戦士の全国集会に結集せよ

11・13集会事務局アピール

全国の戦士諸君！

圧倒的に困難な、敵のフレーム-アップの状況下においてなお屈せず、自ら人民の先頭に立って刻苦奮闘している、全国の英雄的戦士諸君！

そして、搾取と差別、抑圧と侵略、等一切の反人民的悪業に抗して、持続して執念深く、一生

懸命に闘い抜いている、全国の人民諸君！

我々は、本日の集会に於いて、心から連帯の挨拶を述べるとともに、断固とした闘いの意志を表明し、かつ我々の闘争経験を顧みて、とりわけ次の点を確認したいと思う。

我々は敵の予備を起え、その判断を覆す軍事闘争を準備し、貫徹することによって、敵から「情勢」を奪い、大胆かつ直截に、共産主義を提起した。敵を震撼せしめる妖怪を登場させた。

そして、例のスローガンの団結・スケジュール戦術・イデオロギー政治・総じて60年代の所謂「党と大衆」の「死せる政治運動」は、わが遊撃戦士の闘いそれ自体によって、新左翼主義として総括され、一挙に色あせ、決定的な墮落へと追い落とされた。

いまや、傲慢ではなくて謙虚が、嘲笑侮蔑ではなくて真剣素朴が、屁理屈と官僚に代わって創意工夫と勇敢さが、人々の「価値」になろうとしている。

自分が先生の積りで第3第4の潮流づくりに狂奔するのではなくて、まず自らが生徒になって人民に学び、人民の憎悪と苦悩の根源に直結し、体現し、それを解き放つ、革命の偉業が開始されたのだ。

戦端は切り拓かれた。新旧を問わぬ日本左翼の積年の不毛を衝いて、共産主義が、日本人民の心を捉え、その力を結集し、動員しようとしている。日米帝ファシズム軍事冒険主義権力と争って、世界共産主義の息吹きが、日本をつかまえようとしている。

だから、我々はためらうことなく突き進まなければならない。現実存在する確かな手触りのあるものから、軍事闘争から、出発し、その停滞と拡散、頹廢を克服して、より人民的な飛躍局面へ向けて浮上せねばならない。

止むに止まれぬ軍事上の必要性と必然性から、そのなかから、あらたな人民の政治を産み落とさねばならない。政治を越えようとする政治・血の通った、みずみずしい政治は、革命戦争を土台として、軍事的に、獲得されるのだ。

全国の人民と戦士の諸君！

自らの革命的軍事経験を集積し、整備し、普遍化、しよう。水を調べ、魚を鍛え、戦闘に備えよう。自らの規律と作風を整え、先進的に闘い抜こう。闘争型態の急速なエスカレートを、持続的に、系統的・組織的に、中味の充実によって、追いあげよう。

全国の戦士諸君！

人民に学び、人民に奉仕し、人民の先頭に立って闘おう。

世界は人民のものだ。そして「人民の軍隊がなければ、人民のすべてはない」のだ。

諸君！11・13「人民と戦士」の全国集会＝東大安田城前（1じ）で会おうではないか！

11・13「人民と戦士」の全国集会での発言

○開会のことば（集会事務局）

人民と戦士の全国集会を開催したいと考えます。（イグナーシ）

司会は青年行動隊と開催事務局で行いたいと考えます。（ヨージ）

先づ、この集会を準備してきた者として、本集会開催に至る過程を若干報告しておきたい。三里塚斗争に戦士という形でもってかかわってきたところの我々は、9・16斗争を頂点とする三里塚第二次強制収用実力阻止の斗いで、敵国家権力機動隊をセン滅し我々は大きく前進した。然し乍ら、このこのことを逆にいうならば、この前進というものがあまりにも大きかったために、旧来の八派政治の枠内においては勿論のこと、この土壌の中で育てられたところの活動家諸個人においても、日本階級斗争の具体的な方針、あるいは方向性というものを見出すことができなくなったという極めて困難な状況におちついている、というふうにいわなければならないだろうと考えます。然し確認しておかおかなければならないのは、この三里塚で我々が獲得したのは、具体的な技術であって、そして9・16を結節点とするこの具体的な事実、旧来から我々がもっているところの諸概念からするならば、それは混トンであるかも知れないけれども、然し乍らこの具体的な事実の方が、我々が失ったところの事件に関する解釈、スローガン、スケジュール等々よりもはるかに価値のあるものがあるということを確認しなければならないという風に考えます。

この具体的な事実我々がとらえられてしまった以上、我々はこれから一体何ができるだろうかということを考えてみるならば、この具体的な事実をもとに出発するしか出発するしかあり得ないだろう。今、我々とらえたところのこの具体的な事を顧るならば、それは主要に二つの努力即ち一つは人民の努力であり、もう一つは戦士の努力、これによってなされたものであるというふうに考えます。人民の努力に関しては後程報告があるだろうと思えますけれども、戦士の努力は、具体的に69年の我々の敗北以後、大ぼ薩、ハイジャック、そして武器資金奪取、そして連続爆弾斗争に至るところの一連の我々の武器の追求としてあっただろうと考えます。この戦士の努力が敵を一人ずつ、そして一箇所ずつ破壊していくという手工業におわることなくみを結ぶ為には、人民に学び、人民と戦士は戦場としての共通空間のないところでは、人民は自らの生活諸関係の重圧にあえぎ、戦士は譲歩なき弾圧にあえぎあえぎしている。戦場という共通空間を一步離れ、生活諸関係に戻っていったとき、人民がその重圧に耐えかねて死んでいくのは当然のこととはいいなから、我々が何もしやることができなかったことを、我々が知っているのである。我々は、戦士の努力を、そして人民の努力を決して無駄に終わらせることのないように、9・16三里塚で獲得したところの日本階級斗争のその基本的な新たなパターンといったものを維持し、そして拡大し、戦場という戦士と人民の共通空間を創出するために、その第一歩として人民に学ぶ機会として、ここに本集会を提起した訳です。我々は、この提起にそって、青年行動隊と討論し、あるいは人民という名にふさわしい人々と討論してきた訳だけれども、然し乍ら、我々自身の圧倒的な力量不足の故に、この集会を完全な形でもって遂行することが出来なかったことを報告し、ここに集まられた諸君に事務局より深くお詫びしたいと思います。

本集会には大本よねさんが参加される予定でしたが、残念ながら病気の為に本日、ここに来ない

んだということをここに報告しておかねばなりません。

また部落解放の為に闘っている多数の同志がここに結集する筈だったけれども、その同志諸君が東京にきていたのだけれども、地元でもって或る事件が突発的に起きたために引きあげざるを得なかった、その為には本集会に参加できないということを報告しなければなりません。

それから、我々は未だ国家権力との関係において必ずしも充分な防衛体制を獲得していないために、我々は本日のこの集会に直接的に寄せられたところの、この間の遊撃戦争を闘っている戦士からのアピールをテープレコーダーでもって流さなければならないということを報告しておきたいと考えます。

○司会

それではこれから議事にうつり、只今から青年行動隊の島寛征さんを紹介します。(拍手)

○三里塚青年行動隊

青年行動隊の島です。(ヨーン)今、司会者の方から報告がありました様に、大木よねさんが、昨夜我々がお話したわけですけれども、どうしても車にも乗れないということで連れてこられませんでした。それからまた、青年行動隊の諸君も今日、ここにきているのは四名です。後の諸君は色々な仕事とか、この間ずっと続いている追求に対する様々な仕事をやっているためにこられませんでした。この二点についてお詫び申し上げます。

強制第一次執行から、強制第二次執行に至る、我々反対同盟、それから青年行動隊の闘いというのは、今我々が本当に考えているのは、この三里塚斗争6年間の積み重ねあげてきた我々の力というものを一切出し切った闘いを闘おうということがあったし、今第二次執行が終って、やはり我々は、自分達なりに闘い切ったんだというふうに考えています。(イギナーシ)、ただ我々青年行動隊の三宮文男を失い、そして強制代執行を闘い切ったおかつ今、反対同盟の拠点の地域である東峰部落に、大木よねさんが断固として生き抜いている姿を一方でみているわけです。この三宮文男の死と、それから大木よねさんの凄まじい生き方というものに対し、やはり6年間闘い切ったというものの、果して我々が三宮文男の死と大木よねさんの生をどこまで、俺達は本当に俺達自身のものにしてきたのか、ということについて、残念ながらまだ我々自身は深い疑問を持っているところのものであります。

恐らく、三里塚斗争は、権力側や、あるいはマスコミがいつているように終わった訳でもなければ、先が短いものでも決してないと思います。

我々大木よねさんを始めとして三里塚芝山連合空港反対同盟400戸の住民があの地で生きようとする限り、権力があの三里塚という所に空港を建てぬと断言せぬ限り、この闘いはどこまでも続くということははっきりしたと思います。私達はこの間の闘いが我々にとって決してどれ程重要な意味があったかということについて、まだまだ残念ながら総括しきれれておりません。そのために皆さん方の前で、我々三里塚がいかなる展望のもとに、いかにこれから闘っていくのかとい

うことを、今、我々がはっきり皆さんに申しあげることができないのが本当に残念ですけれどもしかしやはり、どんなことをしても、三宮文男が死をもって示した彼の思想性と、それから大木よねさんの、その生き様をもって示している闘いというものの本質、これを我がものとしてあくまでも三里塚に生き続けて、権力に対する徹底した闘いを断固としてつくりあげていこうと考えています。(イギナーシ)

全国からそれぞれの地域で根強く闘っておられる同志諸君との連絡もこの6年間の間に様々な形でついたり、それから、一人々々が非常に孤立した状況の中で闘っておられる深い考えにも接することができました。我々のこういう闘いの中で得た極めて重要な考え方や連絡網というものを今後一層深めて、我々は全国で闘いの先端で頑張っておられる様々な方々、学生諸君、労働者、そういう方々と本当に心の底から接触しあって、三里塚斗争の糧として我々は闘い続けていこうと思います。(イギナーシ)

非常に簡単で、なおかつまとまりが付きませんでした、青年隊の代表として以上挨拶にかえたいと思います。(拍手)

○司会

続きまして、関西労働者戦闘団の方を御紹介したいと思います。(拍手)

○関西労働者戦闘団

関西労働者戦闘団よりこの集会に向けてアピールを行いたいと思います。(イギナーシ)労働者戦闘団として、京大でこの4月より臨職斗争を戦ってきましたけれども、これは理学部段階で、一応諸要求を貫徹した形で、その要求はほとんど当局側がのんで、そして今は学部長室占拠という段階ですが、この斗争においても、斗争が深化していくにつれて権力との衝突というものも明確になり、その辺で、いわゆる反戦派労働運動とか組合運動といったもので、現在労働運動をとらえきれないと、そういうふうに考えます。そして、今後真の労働者の闘いにおいては、三里塚斗争に見られる様に、今まだ関西段階ではそういう権力との深刻な衝突というものはみられないけれど、その斗争自体がどんどん展開されていくにつれて、それは三里塚と同じ様な闘いとして労働運動の中にも現われると思います。そういうためにも、今までの反戦派運動というものを乗り起えて、労働者戦闘団として戦士と人民の結合というか、そういう労働運動を構築せねばならない時期にきていると思います。関西労働者戦闘団としては今後関西においてまた、日本において、新しい労働運動というものを展開していきたいと思っています。簡単ですが、これで終わります。(ヨーン)

○司会

続いて、釜ヶ崎において、釜ヶ崎解放の為に闘っているところの我々の同志からの挨拶をうけたいと考えます。(拍手)

○釜ヶ崎

本日の人民と戦士の全国集會に結集された戦う同志に対して釜ヶ崎で活動している者から簡単な挨拶を送りたいと思います。(イギナーシ)

現在日本において、最も帝國主義的政策の恩恵に浴していない、そういった最下層の労働者達が集っている釜ヶ崎、そうした中においては、現在、最近のことですけれども、ますます労働者たちは仕事にあぶれて、生活はおいつめられていっている。そういった中で文字通り、大衆的な抗議行動としてあまたの暴動をおこしている。そういった中で、警察は文字通り戦闘的に闘う労働者に対して多くの弾圧を加え、次々に逮捕していくといった行動にでている。(ナンセンス) こういった中で、私たちは斗争とは、革命とは、文字通り暴動であり、一つの階級が他の階級を打倒す激烈な行動である。このように考えて、闘いを展開しています。そして私達は文字通り最下層の人民に依拠し、このような人民に一生奉仕していく、このような観点をふまえて、活動を展開しています。現在、ここで全国の同志達に自信をもって提起する程の斗争もいまだ展開されていませんが、私達はこのような最下層の人民に依拠し、そしてこのような人民に一生奉仕してゆく、このような闘いを今後とも展開していきたいというふうに考えています。そして、この間私達は釜ヶ崎において、最下層の労働者達が文字通り実際に参加して、多くの支援団体の協力を得て釜ヶ崎映画の会、そういった活動も行ってきました。これはただ単に一般的な映画を行うのではなくて、最下層の労働者達がみて本当によかったと思う映画、そして今後、私達の斗争を展開していく上で本当に参考になる、そういった映画を連続的に行ってきました。そういった中で全国で公害斗争を闘う同志達、或はその他の斗争を闘う同志から、「水俣」映画を上映するといった具体的な協力をうけてきたし、多くの同志達が、具体的な斗争を通じて結集する、このような斗争を展開してきました。私達は今後とも、この釜ヶ崎において、徹底的に最下層の人民に依拠した斗争を今後とも展開していきたいという風に考えます。

多くの全国の同志諸君の力を合わせ、文字通り我々の力でもって、国家権力を打倒する為に、全力をあげて闘うよう、訴えたいというふうに考えます。(ヨーシ、拍手)

○司会

続いて、我々の本日のこの集會の為に特別に寄せられたところの戦士からのアピールをうけていきたいと思うのですが、現在の我々の力量からして、このマイクを通じて発言をうける事ができないので、残念ながらこのテープでもってこのアピールは寄せられてきたので、このアピールを送りたいと思います。(拍手)

○戦士のアピール

ここに結集された全国の人びと、戦士諸君、今、はじめて私は、一人の戦士として、我々の姿を入びとの前に明らかにしたい。何故なら、我々は人民の子であり、人民への奉仕につらぬかれる武装をたたかぬこうとしているからだ。我々は宣言してはばからない、「我々は戦士なのだ。人民に学び、人民に奉仕し、人民の先頭になってたたかう戦士なのだ」、と。

既成の党派は、「爆弾時代」なるフレームアップにけなげにもり、自ら新左翼時代の終焉(しゆうえん)を刻印し、自ら擬制と化した。彼等は、戦士の何たるかをしらない。そして、彼等の擬制の組織のなかに、戦士の存在することを知らない。擬制のうえに戦争を構築することはできないのである。我々は、小さな旅から大きな旅へ旅立たねばならない。我々は、我々の基盤を人民に、日本人民に求めなければならないのである。

我々は、戦場でしか自分の生活を展開できぬものの群れであり、我々を豊かにしてくれるものは、人民の真紅の血である。我々は、敵に強制された危機と欠除と孤独を、自らの血のたたかいで突破しようとしてきている。

諸君、我々が人民を信頼し、我々が戦士として旅立つことは、義務である。三里塚で、沖縄で、都市最底辺で、基地周辺で、自衛隊内部で、そして国家公安警察周辺で、紅い血は流されている。沖縄、三里塚で、人民の血は流されているのだ。人民の血は、我々の根拠だ、我々が、おのれの基盤のあまりの貧しさに気づいたときに、はじめて人民の豊かさや苛酷さを知るのだ。世界は人民のものである。そして、人民の軍隊がなければ、人民のすべてはないのである。

○司会

続いて、東大の病院において、労働運動を最先頭にたてたところの東大病院反戦からのアピールをうけたい、というふうに考えます。(拍手)

○東大病院反戦

ここに結集された全国の同志諸君に対し、東大病院反戦より東大における労働者の闘いを報告したい、そのように考えます。69年東大病院反戦の前身であるストライキ実行委員会の手によって3名の労働者が、佐藤訪米阻止斗争にむけて無期限ストライキに決起した。そして、この12月病院の大木さんという人が、不当解雇された。その大木さんという人は身分保証が一切なく、そして、そのような不当な労働条件下におかれている病院の特殊な一つの労働者であるわけけれども、その不当解雇撤回斗争を我々は断闘い抜き、そして70年6月北病院移転阻止斗争を圧倒的な全学の労働者の結集と、そして学生の結集によって闘い抜き、不当にも40数名の逮捕者がたわけですけれども、我々はこの斗争を闘い抜き、そして大木さんの不当解雇撤回斗争は、最北端である地震研でもって再びもえ上った。それは、昨年8月宮村教授によってなぐられた石川君、石川君はただ単に自分を定員化せよといったそういった話をしにいった、それだけで宮村教授にはっきりとなぐられた。そして眼の上をろはりもぬう傷をおわされたという状況があったわけです。この石川君の闘いは1ヶ月後ハンストという形であられ、そして、それに大木さん

が連帯のハンストでもって斗っていく、そういうふうな方向性によって、東大全学臨職斗争の火花はもえ上った。そしてその地震研の斗争は、さらに所長室占拠というふうな戦術まで昇り、そしてその防衛隊は労働者がはっきりと主体的に担ってきた。そして昨年11月30日、不当にも当局は、その占拠斗争をおしつぶそうと策動をめぐらし、弥生キャンパス内における地震研と農学部の間金鋼バリをもうけ、我々はその金鋼バリを断固粉碎すべく斗争に決起した。そして我々の斗いに官憲が動員され、またも我々の斗いは40数名の逮捕者をもって弾圧された。そのような東大の臨職斗争は、年末地震研の斗争以後、応微研に広まり、そして応微研の2名の所長室占拠といった一つの形でもってあらわれたけれども、このような労働者の戦闘性ある斗いの前に、一定定員化がなされたわけだけでも、我々の一定程度の不充分性によって、今年7月に弥生キャンパス内に、教授を先頭とした機動隊が導入され、そして、毎朝10時以後ロックアウトされる、そういった情況が現在あるわけです。そして、応微研の教授に対して暴行を与えたというデッチアゲが行なわれ、2名の労働者と一人の闘う学生が逮捕されていった。そして、この3名のうち1人は保釈された訳だけれども、然しその保釈の条件が応微研の職場に入ってはいけないといった一つの、暴力団に象徴される「お礼まいり」的なものがつけられている訳です。この権力の弾圧に応微研の労働者は、応微研の前に就労小屋をたてて、そして今も断固闘っているわけです。そして彼は保釈になると同時に休職処分された、そしてまた一昨日、一人の労働者が休職処分された。彼は臨時職員であったために、それは解雇と同様であり、我々の斗いはその処分粉碎として実質的に闘われている。東大で闘われている臨職斗争はまさしく、日本帝国主義の72年神輿返還をメルクマールとした国内再編成、その一環としての国家公務員パージとして著られるその総定員法にあるわけです。我々の斗いはただ単に定員化されればよいといった問題ではなく、はっきりとその総定員法粉碎にむけ、ある意味でいえば帝国主義的総路線に対決する、そういった問題として現在二つの職場において闘われているその様な情況です。我々の斗いは、ただ単なる「定員化しよう」といったものではなく、はっきりと帝国主義総体にむかったものとして位置づけられる、まともませんでした、これでおわりたと思います。

懇談会のまとめ

人民と戦士の集会直後、集会参加者による総括懇談会がもたれた。参加したのは、三里塚青年行動隊、釜ヶ崎、山谷、関西労働者戦闘団、三里塚現斗、人管斗、そして北海道・東京・関西・九州の学生戦線など約80名であった。

ちようどさしいれられていた焼酎をひとしづくづつ、みんなでなめてから、始った。

司会者からこの集会の趣旨（別紙アピール参照）について再度の提起、また集会を準備する過程での不充分さについて、釈明があった後、参加者のそれぞれ現場をかかえての、発言があった。

紙数の関係から、そのひとつひとつをここに再録できないのは残念だが、特徴的だったのは、発言のスタイル・発想のスタイルが従来のこの種の集会とは異っており、それぞれがかかえている対象と関わり合う作風が真剣な工夫がにじみ出ていることである。各氏の発言をそのまま、再録できない以上、それをこの報告の中で、勝手にまとめることをすべきではないと考えるので、ここでは、三里塚の島氏の発言と、当日の司会者のまとめ、を、再録するとともに、

☆

☆

☆

三里塚 島氏

（前略）反対同盟にしても、おれは反対同盟だときちんと名のるやつが反対同盟なんで、ここまでは反対同盟でこっから先は反対同盟でない、という境界はなんにもない。第1次、第2次強制収用の戦いの時も、周辺や茨城や東京から、学生諸君や労働者諸君のほか、ふつうの農民の人がたくさん集ってくるのですが、おれたちのいまの考え方としては、反対同盟の人たちとそういう時あつまってくるいわゆるやじうまという人たちとの境界というのは、なんにもないわけですね。

そのへんが学生諸君は、支援とか連帯とかいうのはなしで、反対同盟との関係をきちんとさせようということを一先けん命やるわけだけでも、また、考えなければならぬだろうと思いますけども、あゝいうかたちで三里塚斗争を見に来る、あるいは、支援とか農民の中にはいて一緒にやってしまうという人たちの中には、三里塚の農民を支持するとか、ともに闘うという考え方はないわけですね。（中略）

これから自分自身がどうやって生きていくのかという問題について、あるいは大木さんのような存在のしかた、三の宮のような存在のしかた、そういうところで提起されている問題をどこまで、おれの問題にしてゆくのかというより、おれはどこまでおれのものとしてきたのかということについて、まだまだ整理しきれないところがあって、青行隊の連中は今日の集会に当初の段階で、全員参加すると決めていたわけですけど、外からの要因でこれなかったということもあります。どちらかというむしろみなさんの前にほんとうにこういう集会なら集会、よびかけならよびかけ、アピールならアピールというものをきちんともち、しかもこの集会を主体的に準備しきれないということの、ひとつの自分たちにとってのあいまいさが、全体でこの集会に臨むことができなかった原因ではないかと思うのです。

昨年12月6日に、さきほど司会者の方が言われたような意味で、おれたち青行隊40名が、全国にとんでひと月のあいだ各地域斗争をみて歩いて、12月6日集会もって7日に会議をやった、どちらかという、何かをそういうところで結果点を求めるというよりはそういう人々の力によって、第1次から第2次にいたる三里塚の全ゆる状況に、自分は斗いされるか、いや、斗いされるんだという意義を、自分の中につくりながら、12月6日までの準備をしていったわけです。

で今回、われわれ自身がそういうことを、やりきれない、またやろうというはっきりしたものもない。ということで、そういう意味で、青行隊全員がみなさんの前に、でてこれないで、

とっても残念なことなんです。

まあわれわれが、どう考えようと、あるいはこの斗争からどう身を引こうとも、三里塚の状況、あるいは具体的に課せられる車庫というのは、ちっともかわりがないわけで、主体的に自分たちがどう思おうとも、いまの三里塚における問題は、全くかわりがない。我々自身が、なにごとかをやって、なにごとかをしながら生きてゆかない限り、問題はちっとも解決しない。

というようなことで、これからの三里塚の斗争のことも、自分たちの生活のしかた、生き方のことも考えていこうというが、本意にかなり、鮮明にしてゆかなくちやならないという気持はあるわけです。

こんど、中国から招待状がきていて、われわれ反対同盟も、青行も、かなりの人間がことしの末か、あるいは来年そうそう行く予定になっていますけども、そういう与えられた機会を充分利用しながらわれわれの戦線と、自分たちの思想を、確立したいと、考えているわけです。

司 会

充分な討論とはいえませんでしたけれども、我々の意図したものは、今日の集会にも、ここでのそれぞれのなしのなかにも、なにかしらにのびのびとしたものとして出ているように思われます。それが何なのかは、いま言ってしまうと、まちがうというか、空々しいかんじで、むしろ、何回かこのような集会—今日は第1回目であり、過度的というか中間的であったわけですけど—をやりながら、どういうものを通して、どういうふうに結合してゆくのかということ、だんだんはつきりさせていく必要があるんちがうか。

ぼく個人の考えでいわれてもらえば、今年の秋の主要な問題は、いままでにすでにあるいろんなものを、なんとかくっつけてことをやってしまうというより、むしろ、「結合」ということはどんなもんか、それぞれの戦線でもいちどあらいなおしてみなければならぬ。学生戦線でも、いままでのように、ただ学生であるというだけで一語にやれるみえない、安易な結合が、あかんようになるんちやうか、そういう危機感があるわけです。もっともっと、本源的にバラバラにされつつある。これは、いままでの作風では、がんはればがんばるだけ、かえってダメになってしまふところがある。

けども、危機ということは、同時に、われらが斬しところに行きかかっているということでもあるわけで、そのために、今日の集会やこの懇談会—白果集会みたいだったんですけど—は手がかりとなるだろうし、そういうニュアンスは、たしかに出かかっている、と思うわけです。くりかえしになりますが、それが何かを、いまはいえないし、いうべきではないだろうと思うわけです。もうすこし、時間をかけるほうが、いいのではないか。それで、来年はよい時間に、再度「人民と我々の軍」を持とう、と考えています。今回は、ぼくらが「いいだしべえ」でしたが、もっとほかにもやってやろうという人がいたら、それでいいわけです。そして、それにいたる過程で、「戦士」は自らを鍛えあげ、やるべきことをちゃんとやってゆくということが、必要だろうと思

います。

最近、BLACK PANTHER の人が中国へわたった、ということがありました。彼等は、いわゆる政府とはちがって、党の人たちと会ってきたらしいのですが、そこでの中心的話題のひとつは、日本軍国主義についてだったらしいです。ぼくは、そのはなしを、ひとつに聞いたのですが、だから、責任あるはなしとはちがうのですけれども、結局、中国がいらところの軍国主義とは何かということです。

そのはなしのなかで、「日本のいわゆる『新左翼』は、可能性があるとはいえない。なぜなら、彼等は人民と結合する環をもっていない」、というわけです。これは、あくまで、ぼくが直接聞いたわけではないので、ぼくなりにも 訳していつているのですが、では、そういう人民は、どこにいて、毎日どんなふうにしてもらっているのか、それはどうなんや、ということが出てきます。

たとえば、あの大木よねさんの戦斗宣言なんか、なんの政治的な操作や媒介もなしに、ずば一とんとはいつていくような人々たち、そういう人々のなかに、こういうことがあるんちがうか、そういう人々は、都市の底辺—それは、実はどまん中であり、大多数の人たちなのですが—や、都市と農村の境界、また、破壊されつつある農村にが—んとしていつているわけです。これは、いろいろ議論のあるところですけれども、日本における労働の型は、依然として二代目—三代目になるうとも、「出稼ぎ型」だと思ふのです。都市で働いていても、やっぱり「心」は農村にあり、しかも、その農村は破壊されつつある。都市での将来というものは、これはもう全く閉ざされている。そういう人々には、大木よねさんのはなしなんかは、これまでのような政治的回路を必要としない、そういう人たちです。

そういう人々は、これは調査によれば、全国で、ほぼ八百万人いる、というわけです。この八百万人は、いまのままでは、つまり、いまの構造的不況、こういう政治的な関係（国際的状況・力関係もふくめて）のままでは、どこえもいきようがない、結果は、軍隊「へ」いくことになる、というわけです。戦前の日本の軍のなかでは、東北出身と九州出身が最強だといわれたらしいですが、結局おんなじ構造ではないのか。つまり、この八百万人を、ほんとうに「左」から、怒りと屈辱を組織しているのか、それとも、反対側に、「軍」にいかれてしまうのか、ということなわけです。結局、それこそが、ファシズムであり、権力というものと具体的にたたかう領域だと思ふのです。

こういうことで、中国がしつこく言う「日本軍国主義復活」とは、実は、その辺の危険性について、くどいほどに警鐘を鳴らしていることなのではないか—こう考えて、ガクゼンとしたというか、自分の不明を恥じたわけですが、「軍国主義」というのは、なにも、鉄砲の数がどれだけふえたとか、ミサイルがふえたとかいうことだけではなくて—むしろ、それは大事な目やすにはちがいありませんが—、実はこの八百万人の問題だ、ということ、腹をすえて考えてみないといかんのちがうか。こういうふうにと考えると、バクゼンとしていた「人民」ということば、その八百万人の像というかりんかくが、かなりはつきりうかんでくる。

そういう「人民」と、どう結合できるか。あるいは、「結合する」とは、どんなことなのか、

これが問題なわけです。なぜなら、「人民」なくして「戦士」はありえないし、「戦士」なくして「人民」は「軍国主義」とたかえない。今日の集会の名称は、いみじくも「人民と戦士の集会」でしたが、この「と」が問題なわけです。この「と」を、豊かにするというか、明確にするというか、その作業こそが中心のことになってくる。なにしろ、「と」「と」「と」……なわけです。(笑)

その「と」ぬきには、「戦士」は結局戦士になりきれない。また、その「と」ぬきには、いままでのように、いろんな戦線、また人民のなかえ、どーんとはいっていつて腰をすえる、というかはまりこむというか、それだけでは、もうダメになってきたんとちがうか、そう思うわけです。

そのことは、今日のこのそれぞれのおはなしのなかにも、また、この集会を準備する過程ではなし合った部落解放斗争をたたかっている人たちや、筑豊ではなし合った人たちとのおはなしのなかでも、もうはっきりと出てきている。

そういうことで、今日は、何もかもうまくいったとはいえませんが、そういう作業を真剣に、恒常的に、続けることだと思うのです。そして、とりあえず、来年の春に、そういう作業をふまえながら、再度あいまみえようではないか、というわけです。

もうほんとに、そういう、いままでとは異質などーんとした事業に着手しないとどうにもならないところへ来ている。そこまで、成熟しているんです。そして、その事業を新しい作風で、いままでのように、ふりかぶってぶったぎらないと身がもたんというのとちがうように、なんべんも、つみ重ねながら、やいてゆこうというわけです。いずれその事業よりの具体的な内容についてはこの集会の報告書を事務局でまとめますので、その中で少しづつあきらかにしていけると思います。

どうも、ご苦労はんでした。

一 つ の 提 言

「と」の会準備会

何からはじめるべきか それは、すっきりしたかたちでわれわれにはわからない。というよりも、そうしたことは片のつかない未曾有の危機の到来（むろん、こちら側にとっての）というのが、われわれの偽らざる現状認識である。敵＝国家権力は、最近の三里塚青年行動隊に対する弾圧にみられるように、おさえるべきところをちやんとおさえて弾圧にかかっており、こちら側はそれを「見」ていて、あれよあれよと「見」ていて、そして人びとは太平である、平和である。ことは、敵と味方の心をゆりうごかすようにはすすまない。この危機を、どう切り開くのか。

そこで、何からはじめるべきか？ここで、われわれからの一つの提言として、次に毛沢東の「調査研究」に関する一連の発言を引用する。戦士「と」人民というわれわれの問題提起と、この毛沢東の「調査研究」に関する提言とがどう結びつづのか、その実践の経験が今のところ十分に

あるわけではない。ただ、例によってあいまいな言い方る許してもらえば、戦士「と」人民という問題意識と「調査研究」の思想方法が結合する彼方に、現在の危機を突破する地平が開けるはずである。それしかない、それがわれわれの予感である。八百万の「人民」の調査を開始せよ！

すべての実際活動家は、下の方をむいて調査しなければならない。理論だけで、実際の状況を知らないものにとっては、こうした調査活動はとりわけ必要であり、さもないと理論を実際と結びつけることはできない。「調査なくして、発言権なし」ということばは、かつては「せいまい経験論」だとそしられたが、わたしはいまでもそれを後悔していない。後悔していないどころか、わたしは依然として、調査がなければ発言権はありえないということを堅持するものである。多くの人は、「お着きになるやさそく」、なんだかんだと論議をして、意見をだし、これも批判しあれも非難するが、こういう人は実は十人が十人までみな失敗する。なぜなら、こうした論議や批判は綿密な調査をへておらず、無知なでまかせをいっているにすぎないからである。わが党が、いわゆるこの「勅使」のためにどれほど損をしたか、かぞえきれない。ところが、このような「勅使」は、いたるところとびまわり、ほとんどどこにでもいるといつてよい。

『農村調査』のはしがきとあとがき

調査とは、「十ヶ月の妊娠」のようなものであり、問題の解決とは、「ある朝の分娩」のようなものである。調査とは、つまり問題解決のことである。

「書物主義に反対する」

